【字解】【一】溪　浣花溪。【二】落景　日影の落ちかかるとき。【三】逆舟　逆は行逆せしむること。【四】迴溪　まがつてゐるたに川。【五】未盡　覽つくさざるをいふ。【六】喬木　宅邊のそれをさす。【七】練練　しろきさま。【八】峰　雪山をさす。【九】罟七　うをとりあみ、鳥とりの射くるみ。【一〇】畢　ことごとく、こどもがみな。【一一】指揮　こどものうちのだれかがさしづする。【一二】藕　はすれ。【一三】遞鮮美　あたらしくうつくしきもののあとをおひかけまはす。【一四】物賤　鱗をさき、泥をあらはされば魚も藕も賤しくなる。【一五】事已除　こどもらはそれを賣るつもりなり、物賤しくなれば賣れず、これその事已に情理にそむくなり。【一六】餐　ぼんやりする。【一七】暝秦　ひぐれのすがた。【一八】異舍　他人のいへ。【一九】出處　出づると處るると。【二〇】齊　同じ樣にみる、これ處（隱退）してゐても出（仕官）てゐるとおなじこころでゐるをいふ。【二一】霜中　しもふりしなかに。【二二】登　耕作物のみのること。【二三】故畦　ふるきあぜ。【二四】濁醪　にごりさけ。【二五】初熟　新しくできる。【二六】東城　成都の城は浣花の居の東にあり、故に東城といふ。

【題義】浣花溪に舟をうかべしことを記す。卜居後はじめて上流に棹させしなり。

【詩意】夕日のかたむくころざしきからおりて舟をすすませて、まがつてゐる溪川にうかんでみる。自分のすまひは小さいとだれがいふのか、喬木のある西の方面はまだみきはめぬのではないか。ここの野外はほんたうに草ふかくかたよつてゐて秋景色は十分のつめたさをもつてをる。雪山の雪はまつしろく、またほそぼそと雲のうへの覽があらはれてゐる。』　溪川の左右の岸には子供らがたはむれてゐる、彼等はみんなうをとりあみ、鳥とりの射くるみをたづさへてゐる。彼等にひつくりかへされて鵝や芰はみだれ、餓鬼大將がさしづはするもののみちをまようたりする。魚を得ればその鱗を割きとつたり、蓮根をとつては泥もあらはぬ。人のこころはうつくしいものを逐ふものだ、しかるにこどもらはかく物のねうちをさげてしまつてはあてにしてゐることがはづれてしまふのである。』　自分の村も夕ぐれの姿がぼんやりしてきた。他人のいへでも雞がはやねぐらにすんだ。自分はさびしくもどこへゆかうとおもふのか、ひつこんでゐるのも出てつかへるのもおなじことにみらるるではないか。きもののうへに新月の光がさす、霜のなかではたけのうねの作物がみのつてゐる。にごりさけもひとりでにできた。遺憾なのは東城に太鼓やこつづみの音の多くて騷亂のやまぬことだ。

郭を出づ

霜露晚凄凄。高天逐望低。
遠煙鹽井上。斜景雪峰西。
故國猶兵馬。他鄉亦鼓鼙。
江城今夜客。還與舊烏啼。

【字解】【一】凄凄　つめたし。【二】逐望低　ながむるままにひくくさがるがごとし、露おりてながめをくらくするなり。【三】遠煙　遠方の煙、煙はしほなたくけむり。【四】斜景　ななめにさす日光。【五】雪峰　雪山なり。【六】故國　洛陽。【七】江城　成都、錦江にそひたる城。【八】客　自己をさす。【九】與舊烏啼　の意、與ニ舊烏ニ啼ト調す、人には號、泣、などいひ啼とはいはざるも作者は啼の字を用ふ。

【題義】成都の城中より郭をでてゆふべに草堂の方へかへりしことをのぶ。

【詩意】夕方霜や露がつめたく置く、あたりをながめると、ながめにつれて天がたれさがる樣にくらくなる。遠方にみゆる煙、それは鹽井の上にたちのぼるけむりである。雪峰の西にはいり日のひかりが斜めにさしてゐる。故國洛陽の方にはまだ兵馬がさわいでゐるし、他郷たるここにもまた太鼓、つづみのおとがやまぬ。今夜この江城の旅人（自分）はただやつばりまへまへからの烏とともに啼くより外にしかたがない。

恨別　別を恨む

洛城一別四千里。
胡騎長驅五六年。
草木變衰行劍外。
兵戈阻絶老江邊。
思家步月清宵立。
憶弟看雲白日眠。

【字解】【一】洛城　洛陽の城。【二】胡騎　安祿山の騎兵。【三】五六年　天寶末安祿山の亂起りしより上元元年までにて五六年なり。【四】草木變衰　宋玉が「九辯」の語、變衰とは色がはりおとろへること、秋の時節をいふ。【五】劍外　劍門の外、蜀をさす。【六】阻絶　中間の道路をへだてらるること。【七】江邊　錦江のほとり。【八】思家・憶弟　家と弟とは洛陽及其東方に在り。【九】河陽近乘勝　上元元年三月に李光弼、鎮安太清を懷州城下に破り、夏四月又史思明を河陽の西潘に破る。【一〇】司徒　李光弼をいふ、至德二載李光弼は檢校司徒となる。【一一】幽燕　幽州と燕、ともに直隸の北部にして賊軍の根據地なり。

【題義】故郷の家族との別れ久しきを恨みてつくれり。

【詩意】洛陽の城と別れてから四千里の遠くにある。賊軍がとほく驅けて攻めよせてから五六年になる。自分は草木の色がはり衰ふる秋にあたつて劍門のそとなる蜀にさまよひ、いくさごとにじやまされて錦江のほとりにくらしてゐる。家を思うては月下に歩してはれたよるに立ち、弟をおもうては雲をみながらまひるなか眠つたりする。きくところによると河陽の地方では官軍がちかごろ勝ちかけたさうであるが、どうか司徒（李光弼）は我がために急に進んで幽燕の地方をうち破つてもらひたい。

聞道河陽近乘勝。
司徒急爲破幽燕。

聞道らく河陽近勝に乘ずと、司徒急に爲に幽燕を破れ。

散愁二首　愁を散ず　二首

久客宜旋旆。興王未息戈。
蜀星陰見少。江雨夜聞多。

久客宜しく旆を旋すべし、興王未だ戈を息めず。
蜀星陰りて見ること少く、江雨夜聞くこと多し。

百萬傳深入寰區望匪他。百萬深く入るを傳ふ、寰區望むこと他に匪ず。
司徒下燕趙。收取舊山河。司徒、燕趙を下して、收取せよ舊山河。

【字解】〔一〕散愁　うれひのこころをちらす。〔二〕久客　ながくなつたたびびと、自己をさす。〔三〕旋師　はたなかへす、故郷へもどること。〔四〕興王　中興の君、肅宗をさす。〔五〕息戈　「ほこを休息させる、いくさをやめること。〔六〕百萬　多くの官軍。〔七〕深入　賊塊へふかくはひりこむ。〔八〕寰區　天下　〔九〕望匪他　望むことはほかのことでない、即ち次の司徒二句はその説明なり。〔一〇〕司徒　李光弼。〔一一〕燕趙　ともに直隸の北部、賊の據る所。〔一二〕舊山河　もと唐の朝廷に屬せし山河。

【題義】官軍の勢よきにより氣ばらしのためにつくりし詩なり。

【詩意】自分といふ長長のたびびとははやく故郷へはたをかへすのがよいのだが、中興の君におかせられてまだいくさをやめさせることができずにおいでになる。蜀の星は陰つてよくみえることはすくないし、江の雨は夜に聞くことが多い。傳ふる所によれば多くの官軍は敵境へふかくいりこんださうだが、天下の望む所はほかのことではない、ただ司徒李光弼が燕趙の地を下して朝廷の舊山河を取つてしまふことそのことだ。

〔一二〕

聞道幷州鎮。尚書訓士齊。聞道らく幷州の鎮、尚書、士を訓すること齊しと。
幾時通薊北。當日報關西。幾時か薊北に通じて、當日、關西に報せむ。

【字解】〔一〕幷州鎮　山西省太原府をいふ、ここはもと李光弼の鎮所なりしが光弼は河陽の方へやられてあとは王思禮之に代れり。〔二〕尚書　王思禮をさす、乾元二年七月兵部尚書・路泌節度使・管國公・王思禮を以て太原尹を兼ねしめ北京留守に充つ、（北京は太原をいふ）。〔三〕齊　ひとし、ととのふこと。〔四〕薊北　薊は薊州、燕の地。〔五〕當日　その日、薊北に通ずる日をさす。〔六〕關西　函谷關の西、關西・關中は長安をさす。

【詩意】きけば幷州の鎮所では王尚書は士卒を訓練せらるることがよくととのうてゐるとのこと。いつになつたら賊の根據地薊州の北の方まで道路が通ずることができて、その日之を長安の都へ報知することになれるだらうか。自分は都の御所をこふるために丹き心もうちこはれ、涙は衣をうるほして白髪あたまながらになきつつある。この老の魂は招かうとしても招けず、故郷のかへり路に永久にまようてゐるであらう。（これ早く薊北に通せんことを待つ所以なり）。

建都十二韻　都を建つ十二韻

戀闕丹心破。霑衣皓首啼。闕を戀ひて丹心破れ、衣を霑ほして皓首啼く。
老魂招不得。歸路恐長迷。老魂招き得ず、歸路恐らくは長く迷はむ。

蒼生未蘇息。胡馬半乾坤。蒼生未だ蘇息せず、胡馬、乾坤に半なり。
議在雲臺上。誰扶黃屋尊。議は雲臺の上に在り、誰か黃屋の尊を扶けむ。

建都分魏闕。下詔關荆門。
恐失東人望。其如西極存。
時危當雪恥。計大豈輕論。
雖倚三堦正。終愁萬國翻。
牽裾恨不死。漏網辱殊恩。
永負漢庭哭。遙憐湘水魂。
窮冬客江劍。隨事有田園。
風斷青蒲節。霜埋翠竹根。
衣冠空穰穰。關輔久昏昏。
願枉長安日。光輝照北原。

建都を建てて魏闕を分つ、詔を下して荆門を闢く。
東人の望を失はむことを恐るるも、其れ西極の存するを如せむ。
時危くして當に恥を雪ぐべし、計大なり豈輕しく論せむや。
三堦の正きに倚ると雖も、終に愁ふ萬國の翻らむことを。
裾を牽く恨らくは死せざりしを、網より漏らす殊恩を辱なうす。
永く負く漢庭の哭、遙に憐む湘水の魂。
窮冬、江劍に客たり、隨事、田園有り。
風は斷つ青蒲の節、霜は埋む翠竹の根。
衣冠空しく穰穰たり、關輔久しく昏昏たり。
願はくは長安の日を枉げて、光輝、北原を照らさむ。

【字解】【一】建都　新に都を建設するといふ、史によるに至德二載に蜀郡を南京とし、鳳翔を西京とし、西京(長安)を中京とす。上元元年九月改めて南都を荆州に置き荆州を以て江陵府となす。二年九月鳳翔の西都及び江陵の南都の號を廢め、寶應元年に復た建つ。此詩は上元元年荆州を南都とするときの作なり。荆州を南都と建つることは時の荆州刺史呂諲なるものの建議に本く。作者は之に反對の意見をのべたるなり。【二】蒼生　人民。【三】蘇息　よみがへり、休息する。【四】胡馬　賊軍の兵馬。【五】雲臺　後漢の時たてたる宮中の高臺、ここは朝廷をさす。【六】黄屋尊　天子の尊きをいふ、黄屋は天子の乘らるる車蓋のうら黄絹にて張るを以て之に乘る天子をもさす。【七】分閫閫　分とは分設すること、閫閫は高き宮門、荆州を都とするは中央の宮闕を分つと似たり。【八】闢荆門　闢とは新天地をはじめひらくといふ、荆門は山の名、荆州にあり、名山を借りてその地を示す。【九】失東人望　東人とは荆州の人をいふ、これは荆州を都とせぬときの場合にはかくの如しといふことなり。【一〇】如　如し之何と同じ。【一一】西極　成都をさすといひ、長安をさすといひ設區區たり、余は鳳翔をさすならんと考ふ、これ鳳翔は西京とせられ、のちに上元二年には荆州の南都とともに罷められ二者對するによりかく考ふるなり、作者は長安のことは「北極」といふを例とす。【一二】雪恥　はぢをそそぎきよめる、賊軍にうちまけたるはぢなり。【一三】計大　都を建つることは大計なり。【一四】倚三堦正　三堦は泰堦なり、天に泰堦といふ星座ありて上中下の三堦より成る、三堦平等なれば天下太平なりといふ、正は平正にてその位正しきをいふ、「三堦の正に倚る」は蓋し肅宗の政治をとりなしてほめていふ、太平のおかげによるとはいふものの意ならん。【一五】翻　みだるるをいふ。【一六】牽裾　作者捨遺の官として天子の裾をひきて强諫するといふ、房琯がことにつき諫めしをさす、魏の辛毗といふもの文帝を强諫し、帝起ちて内に入らんとせしときその裾を引きたる故事あり。【一七】死　諫めて死するなり。【一八】漏網　罪をゆるさるること、「漢書」刑法志に網漏吞舟之魚の語あり。【一九】殊恩　特別のごおん。【二〇】漢庭哭　漢の賈誼國事をうれへて痛哭す。【二一】湘水魂　楚の屈原懷王をいさめ、湘水のほとりに流され、襄王のとき汨羅の淵に身を投じて死せり、賈・屈を以て自ら比す。【二二】江劍　江は錦江、劍は劍閣、蜀をさす。【二三】隨事　隨便のごとし。【二四】田園　浣花溪草堂の居をさす。【二五】風斷二句　節物をいひかれてたとへを寓す。【二六】衣冠　朝廷の官員をいふ。【二七】穰穰　多き貌。【二八】關輔　關中の三輔、輔は都のたすけとなる地、今日いふ大都會の郡部の類、長安の三輔は扶風・馮翊・京兆これなり。【二九】昏昏　日色くらし、賢智者なきをいふ。【三〇】長安日　長安をてらす太陽。【三一】北原　河北の地、即ち賊史思明の據れる地方をさすといへり。

【題義】荆州に南都を建つることに就き反對意見をのべたる詩。詳は「字解」の條をみよ、上元元年九月以後の作。

【詩意】賊の兵馬は天下の半分にもひろがつて、人民は安息を得ない。このとき雲臺のうへで建都の議論がなされるが、そもそも何人が天子の尊厳をおたすけいたすのであるか。』　きけば詔を下して荆門の地方をひらいて、都を建てて宮門の分所を置かれるとのことである。もしそれをやめるならば東方荆州の人人の失望は氣の毒なこととはおもふけれども、すでに西京（鳳翔）といふものがあるのをどうするか、そんなにいくつもいくつも都を置くには及ぶまい。いまは時世危険な際である、ただこれまでの恥をそそぐべきであつて、都をあらたに設けるなどの大なる計は容易に論ずべきではなからう。もしそんなことをすればそれは御政道の正しきによるとはいへ、天下萬國がひつくりかへりはせぬかと心配するのである。』　自分はさきに房琯が事についてお諫めしたとき辛毗のごとくお裾をひつぱつてむりにお諫めして死ねばよかつたのであるが、僥倖に刑罰の網からゆるされて特別のご恩にあづかつた。賈誼が漢廷に哭した樣にならぬのは申譯がないが、屈原の樣に湘水の魂と化するは氣のどくなことである。いま冬がれの時節にこの蜀の地に客となり、ともかくも田園までもつてゐる、その田園では青い蒲の節は風に吹きちぎられ、翠の竹の根は霜に埋められてゐて、甚だみるかげもない。』　自分のみるところでは長安の官員どもはただやたらに多いばかり、都の附近の地は昏昏として日の光もささぬかの樣である。どうぞ長安をてらす日の光をむりにも向けかへて、河北の地方を照らすやうにしてもらひたいものである。南方に都を新設するなどは急務ではない。

村夜

風色蕭蕭暮。江頭人不行。
村春雨外急。隣火夜深明。
胡羯何多難。樵漁寄此生。
中原有兄弟。萬里正含情。

【字解】【一】村夜　江村の夜。【二】江頭　錦江のほとり。【三】村春　むらびとの米つきのおと、水車を用ひてつくなり。【四】隣火　となりの家の火。【五】胡羯　安祿山・史思明が黨。【六】中原　洛陽地方。【七】含情　じつとおもひをむねのうちにもつ。

【題義】江村の夜のさまと兄弟を思ふ情とをのぶ。

【詩意】あたりの樣子がさびしくひがくれた。かはのほとりにとほる人もない。雨のふるなかとほくに水車の音がきこえ、夜もふけたのにとなりの家ではあかりがまだついてゐる。なんで賊軍らは難儀を多くおこすか、自分はしばかりや、れふしのあひだに生涯をよせてゐる。みやこの方には兄弟どもがゐる。それについて遠くのことをかんがへじつとふさぎこんでゐる。

寄楊五桂州譚

【原注】因州參軍段子之任。

楊五桂州譚に寄す　【原注】州の參軍段子が任に之くに因る。

五嶺皆炎熱。宜人獨桂林。　五嶺は皆炎熱なり、人に宜しきは獨り桂林のみ。
梅花萬里外。雪片一冬深。　梅花、萬里の外、雪片、一冬深し。
聞此寬相憶。爲邦復好音。　此を聞いて相憶を寬にす、邦を爲むる復好音。
江邊送孫楚。遠附白頭吟。　江邊、孫楚を送る、遠く附す白頭吟。

【字解】【一】楊五桂州譚　桂州の刺史楊譚。【二】五嶺　廣東・廣西の北にある五つの嶺、始安・越城・臨賀・大庾・騭嶺、是なり。【三】參軍段子　楊譚が部下の官たる段某、段は成都より桂州へ赴任するなり。【四】大庾嶺最も梅を以て名あり、桂林に關しては少しく遠すぎるも之を用ふ。【五】桂林　卽桂州、今の廣西省桂林府。【六】梅花　嶺南には雪なし、ただ桂林には之ありと、冬雪あれば夏になりても他所より涼しき地なること知るべし。【七】雪片　嶺南にはなし。【八】此　梅あり、雪ありとのことをさす。【九】寬相憶　おもふこころをくつろがす。【十】好音　よきたより、蓋し楊より書信ありしをさす。【十一】爲邦　桂州を治むること、其地の長官たることをさす。【十二】江邊　錦江のほとり。【十三】送孫楚　孫楚は晉の石苞が參軍なり、今楊を石苞とみなし、段子を孫楚にあてていへり。【十四】附　托すること。【十五】白頭吟　此の詩篇をさす。

【題義】桂州の刺史楊譚のところへ、その參軍たる段某が赴任するにつけて寄せたる詩。

【詩意】五嶺地方はどこも炎熱で、人體によろしいのは桂林ばかりである、そこは萬里の遠くに在つて梅の花あり、冬ぢう雪も深いといふことである。この話をきいて自分もいくらかあなたを憶ふこころをくつろげ得たのであるし、そんな場所で長官になつてゐるといふことはまことにいいおたよりをきくことである。ここでそちらへ參軍がゆかれるのを送るによつて、この拙吟を依托してやる次第である。

西郊

時出碧雞坊。西郊向草堂。　時に碧雞坊を出で、西郊より草堂に向ふ。
市橋官柳細。江路野梅香。　市橋、官柳細に、江路、野梅香し。
傍架齊書帙。看題檢藥囊。　架に傍ひて書帙を齊へ、題を看て藥囊を檢す。
無人覺來往。疎懶意何長。　人の來往を覺る無し、疎懶、意何ぞ長き。

【字解】【一】西郊　成都の城西の野外。【二】碧雞坊　成都城の西南の坊の名。【三】市橋　城の西南四里にありといふ。【四】官柳細　官でうゑた柳の條ほそし。【五】傍架　架は「本だな」。【六】帙　書衣なり。【七】題　標題。【八】檢　しらべる。【九】無人覺來往　人の己の來往を知らざるをいふ。（仇氏は此解を曲說として「人跡の來往を見ざるを謂ふ」ときたるがそれこそ曲說なるべし）往とは草堂より城中へでかけしをいふ、來とは今城中より草堂へもどり來るをいふ、此詩は歸來を主としてのべたり。

【題義】城中を出で西郊より草堂にもどり來れることをのぶ。上元元年冬の作ならんといふ。

【詩意】自分は時として碧雞坊から出て西郊を經て草堂へと向ふ、途すがら市橋では柳がほそぼそと垂れてをり、かはぞひの路には野梅の花がにほうてゐる。草堂につけば書架のそばへよりそうて帙を

ととのへたり、標題を看ながら藁嚢をしらべたりする。往きもかへりもだれもそれに氣がつかぬ。こんな生活はよしやうな氣もちがのんびりとしてまことによろしい。

和裴迪登蜀州東亭送客逢早梅相憶見寄

東閣官梅動詩興。
還如何遜在揚州。
此時對雪遙相憶。
送客逢春可自由。
幸不折來傷歲暮。
若爲看去亂鄉愁。
江邊一樹垂垂發。
朝夕催人自白頭。

裴迪が蜀州の東亭に登りて客を送り早梅に逢ひて相憶うて寄せらるるに和す

東閣の官梅、詩興を動かす、
還何遜が揚州に在りしが如し。
此の時、雪に對して遙に相憶ふ、
客を送り春に逢ふ、自由なる可し。
幸にも折り來つて歲暮を傷しめず、
若爲看去つて鄉愁を亂らむ。
江邊の一樹、垂垂として發す、
朝夕人を催して自ら白頭ならしむ。

【字解】【一】裴迪　前にみゆ。【二】蜀州　成都府崇寧州の地、成都の西四百里にあり。【三】東閣　東亭なさす。【四】官梅　官のうゑしうめ。【五】動詩興　迪がうごかすなり。【六】何遜在揚州　梁の何遜天監六年揚州の刺史建安王偉が記室として之に從つて揚州にあり、早梅詩を作る、中に枝橫卻月觀、花遶凌風臺の句あり。【七】對雪遙相憶　迪がこちらを憶ふないふ。【八】送客逢春　迪ないふ。【九】可自由　迪を評するなり、心の自由を得たるならんといふなり。【一〇】折來　梅を折りてこちらへ贈つてくれるないふ。【一一】傷　こちらが心ないためる。【一二】若爲　いかでか。【一三】看去　折來の梅花をみるないふ。【一四】亂鄉愁　みれば思鄉の愁心をみだる。【一五】江邊　錦江のほとり。【一六】垂垂　枝がしだれて咲くさま。【一七】發　梅花のひらくないふ。【一八】催人白頭　梅花をみればまた一年をすごすかと感ず、これ花、人の老をうながすに似たり。

【題義】裴迪が蜀州の東亭にのぼつて人を送り、そのとき早咲きの梅花をみたので、自分を憶うて詩をよこしてくれた。その詩に和して作つた詩。上元元年冬の作。

【詩意】あなたは東閣の官梅をみて詩興をうごかした。ちやうどむかし何遜が揚州に居たときのことによく似てゐる。そのときあなたは雪に對して自分のことをおもうてくれたが、旅立つ人を送りながら春げしきにであうたなんぞはさだめし心もくつろいだこととおもはれる。自分はそれとちがひしあはせとあなたがその梅の枝を折つてよこしてくれぬので歲暮を傷まずにすんだのである、よこされたら最後どうしてそんな花を看て思鄉の愁心をみだすことができよう。ここのかはべりにも一本梅があつてしだれてさいてゐるが、それをみるとあさゆふわたしをうながして白があたまにさせるのではないかとおもはるるのである。

暮登四安寺鐘樓寄裴十迪

暮倚高樓對雪峰。

暮に四安寺の鐘樓に登り裴十迪に寄す

【字解】【一】四安寺　新津縣南

僧來不語自鳴鐘。
孤城返照紅將斂。
近市浮煙翠且重。
多病獨愁常閟寂。
故人相見未從容。
知君苦思緣詩瘦。
太向交游萬事慵。

僧來つて語らず自ら鐘を鳴らす。
孤城の返照、紅將に斂まらむとす、
近市の浮煙、翠且重なる。
多病獨愁常に閟寂、
故人相見るも未だ從容たらず。
知る君が苦思、詩に緣りて瘦せたるを、
太く交游に向つて萬事慵し。

ともだち、自己をさす、此句迫の來訪なきをうちむ意あり。

【題義】夕ぐれに四守寺の鐘つきだうにのぼつて裴迪に寄せた詩。作者上元二年には時時蜀州に往來せりといふ、此詩は新津にての作。

【詩意】自分は夕ぐれに高樓に倚つて雪峰に對してゐると、寺の僧が來てものもいはずひとりで鐘をつきならす。城の夕ばえの紅の色はなくなりかけてゐるし、近い市場の煙は翠いろさへ重なつてをる。自分は多病であり、ひとり愁へていつもさびしがつてゐる、あなたとは面會はしてもまだゆつくりとはなしあはないのだ。あなたは苦しんでかんがへるあまり詩のために瘦せてはゐるが、あんまり友だちなかまに向つて萬事ぶしやうをしてゐるやうだ。（ちとあそびにおいでなさらぬか、の意。）

寄贈王十將軍承俊

王十將軍承俊に寄贈す

將軍膽氣雄。臂懸兩角弓。
纏結青驄馬。出入錦城中。
時危未授鉞。勢屈難爲功。
賓客滿堂上。何人高義同。

將軍、膽氣雄なり、臂に懸く兩角弓。
纏結す青驄馬、出入す錦城の中。
時危くして未だ鉞を授けられず、勢屈して功を爲し難し。
賓客、堂上に滿つ、何人か高義同じき。

【字解】【一】角弓　角にてかざりしゆみ。【二】纏結　馬の裝飾物をまとひ、むすぶ。【三】驄馬　青白馬。【四】錦城　成都の城。【五】授鉞　賊を征伐する權能を與へられる、鉞は「まさかり」。【六】賓客　將軍のお客分の人人。【七】何人高義同　高義は將軍の友義の高きこと、作者に對し禮を厚くしてもてなしくれることをさす、何人同とは自分と同じほどに將軍の高義を受くるものは殆ど他にはあるまいといふなり、將軍の厚誼を感謝する語なり。

【題義】將軍王承俊によせおくつた詩。將軍は成都に在り、作者は何の地にありしときのことか詳ならず、或は浣花村より城中へおくりしか。仇氏は青城に在りしときの作なりといへるも其の證なし。

【詩意】王將軍はきもだま氣象が雄雄しくて臂には二つの角弓をぶらさげ、青馬を飾つてそれにまたがつて錦城の中に出入りしてをる。いま時世は危險なときであるのに將軍はまだ鉞を天子から授けられて征伐の權を委ねられず、勢のびずして功をたてることはむつかしい。（惜しいことだ。）將軍の堂上には賓客はいつぱいあるが、だれが自分と同じほど將軍の高義をうけるものがあらうか。（自分には特別に厚くしてくださる、ありがたいことだの意。）

奉酬李都督表丈早春作　李都督表丈が早春の作に酬い奉る

力疾坐清曉。來詩悲早春。轉添愁伴客。更覺老隨人。紅入桃花嫩。青歸柳葉新。望鄉應未已。四海尚風塵。

【字解】〔一〕李都督　其人未だ詳ならず。〔二〕表丈　いとこの關係ある人にて且年長者とみえたり。〔三〕力疾　病みながらむりに起きあがること。〔四〕來詩　李からよこした詩、卽ち早春の作。〔五〕客、人　ならびに自己をさす。〔六〕嫩　やはらか、みづみづし。〔七〕歸　ひとへにその方へと赴くないふ、早春なれば青色は柳の樹葉よりも先づ柳葉の方へゆくといふなり。〔八〕應未已　舊解に單に自己の鄕鄕の念がやまぬといふ樣にいへるは恐らくは未だ其意を得ず、此語は李の意をおしはかりて暗に自己もこれに贊同せしのみ、應の字は推測の辭なり。

【題義】年長のいとこ李都督が早春の詩をみせてくれた、それにこたへた作。

【詩意】自分は病氣なのにむりに起きてはれたあさにすわつてゐた。そこへあなたの詩が來たがそれをみると早春のさまをみて悲んでをられる。このお作はいよいよ愁をまして自分に伴はしめ、これまでよりもつと老がわが身にくつついてきたことを感じさせるのである。なるほど紅の色は桃の花に入りてみづみづしく、青色は先づ柳の葉の方へかたむいて新しくみえてはきたが、故鄕をながめおもはるる念はおやみにはならぬことであらう、なぜならば天下はまだ兵馬の塵だらけであるから。（自分も御同樣である、との意。）

題新津北橋樓　新津の北の橋樓に題す

望極春城上。開筵近鳥巢。白花簷外朶。青柳檻前梢。池水觀爲政。廚煙覺遠庖。西川供客眼。惟有此江郊。

望は極まる春城の上、筵を開いて鳥巢に近し。白花、簷外の朶、青柳、檻前の梢。池水に爲政を觀、廚煙に遠庖を覺ゆ。西川、客眼に供するは、惟此の江郊有り。

【字解】【一】新津　縣の名、今成都府に屬す、唐には蜀州に屬せり、成都の西南にあり。【二】橋樓　橋のほとりの樓。【三】望極　はてしなく遠くをのぞむ。【四】近鳥巢　場所が樹木の上にありて高きをいふ。【五】觀爲政　この時は縣令が酒宴をひらきしなり、因つて政治のことをいふ、爲政は政治の仕方をいふ、觀はその清きをみるをいふ。【六】廚煙　くりやのけむり。【七】遠庖「禮記」（玉藻）に君子遠ニ庖廚一の語あり、臺所は殺生を爲す故に君子は之をとほくにおく。【八】西川　蜀の西部をいふ。【九】客眼　旅客のまなこ、自己の眺望をいふ。【一〇】江郊　かはぞひの野はら。

【題義】新津縣の北の橋のほとりの樓にて縣令の酒宴にあづかりて作れる詩。

【詩意】高い樹木の鳥の巣に近いところで筵を開いて、春の城の上で際限なき遠望をはせる。のきのそとの枝には白い花がついてをり、てすりの前の柳は梢が青くみえる。池の水は清らかであつて、之によつて縣の政治も濁らぬことがみられる、臺所の煙がのぼるが、これも經典の本文どほりまぢかにはない。蜀の西部で旅客の眼に供して佳なるところは、ただここの江郊だけだ。

遊修覺寺[一]

修覺寺に遊ぶ。

野寺江天豁。山扉花竹幽。野寺、江天豁なり、山扉、花竹幽なり。
詩應[二]有神助。吾得[三]及春遊。詩應に神助有るなるべし、吾春遊に及ぶことを得たり。
徑石相縈帶。川雲自去留。徑石相縈帶す、川雲自ら去留す。
禪枝宿衆鳥。漂轉暮歸愁。禪枝、衆鳥宿す、漂轉、暮歸愁ふ。

【字解】【一】修覺寺　新津縣治の東南五里に修覺山あり、山に修覺寺あり。【二】詩應二句　連絡してみるべし、前句自ら詩るにあらず、風景のすぐれしをいふなり。【三】神助　鬼神のたすけ。【四】及春遊　「及」とはおひつく、まにあふ。【五】縈帶　帶のごとくめぐる、紆曲したみちに處處に點點とあるをいふ。【六】禪枝　寺の樹木の枝。【七】漂轉　漂泊流轉の生涯。

【題義】新津縣の修覺寺にあそびて作れる詩。上元二年の春の作。

【詩意】この野外の寺のところは江のうへをおほふ天がひろらかである。近づくとその扉には花や竹が幽邃に生じてゐる。自分はしあはせと春の遊びにまにあふことができたのであるから、ここで詩を作れば鬼神の助を得らるることであらう。近くにはうねつたこみちに石が處處に點在し、遠くでは川上の雲がひとりでにゆききしてゐる。こんなけしきをながめるうちもはやお寺の樹の枝に多くの鳥がとまる時刻になつた。流轉生涯の自分は暮れがたに歸らうとすればうれひのこころが生ずる。

後遊[一]

寺憶曾遊處。橋憐再渡時。寺は憶ふ曾遊の處、橋は憐む再渡の時。
江山如[二]有待。花柳更無[三]私。江山、待つ有るが如し、花柳更に私無し。
野潤煙光薄。沙暄日色遲。野潤ひて煙光薄く、沙暄にして日色遲し。

客愁全爲減。捨此復何之。　客愁全く爲に減ず、此を捨きて復何くにか之かむ。

【字解】【一】後遊　のちのあそび。前詩修覺寺の遊びを敍す、此詩は後の再遊を敍す。【二】有待　吾を待つないふ。【三】無私利己心なし、だれにでも其の美しさをかつてにみせてやる。【四】野調　調は水蒸氣をふくむないふ。【五】煙光薄　調はゆる「はるぐもり」にて氣象がぼやけてみゆるなり。【六】沙暄　これは熱の方からいふ、日光きつく照らす故に江邊の沙あたたかなり。【七】日色遲　日の永きないふ、「遲」とは太陽の行くことがおそく感ぜらるるないふ。

【題義】修覺寺に二度めにあそべる詩。

【詩意】またあそびにきた。寺をみればなるほどまへにあそんだ場所だなとおもひ、橋を渡ればまたいまわたるのかと愛憐の情がおこる。江や山をみると自分がくるのを待つてゐてくれた樣であり、花も柳も私心をもたずにきままに自分に其の美を賞玩させてくれる。野はらはうるほひをおびて煙の光薄く、川べりの沙はあたたかにして日脚もおそくあるくげなり。これをながめたためにたびのうれひは全く減せられた。こんないいけしきのところをおいてはまたどこにゆかうか、ゆけるものではない。

絶句漫興九首

眼見客愁愁不醒。　眼に見る客愁愁へて醒めざるを、

【字解】【一】絶句　詩體の名、古體詩の四句一解をきりとりたる形なるより名づく、押韻・平仄に一定の規則あり、但杜の絶句は往往律を守らざるものあり。【二】漫興　率然興に乘じて作れるが故にかくいへり。【三】眼見　眼前に見ること

無賴春色到江亭。　無賴の春色、江亭に到る。
即遣花開深造次。　即ち花をして開かしむるも深く造次なり、
便教鶯語太丁寧。　便ち鶯をして語らしむるも太だ丁寧なり。

明明白白なるないふ、「見」の字の主辭は次句の「春色」ならん、これは第三首の熟知の「知」の字の主辭が次句の「燕子」なるとおなじのべかたなるべし。【四】愁不醒　愁ひのうちにひたりて醉へるがごとし。【五】無賴春色　無賴は無=聊賴=ことにてあてにならぬ義、無賴漢といへばあてにならぬ男、即ち「ごろつき」なり、春景色を無賴といふは之を罵る辭なり、「ろくでなしの」といはんがごとし。春を罵るは眞に之をきらふに非ず、自己が愁の中に在るに春がそれを知らぬかほにやつてくるが心にくしといふなり、讀者よろしく作者内面の切情をくみとるべし、他の諸篇にても往往春色に惱まさるるの意をのべたり。【六】江亭　錦江のほとりの草堂の亭。【七】遣、教　並に「して、せしむる」。二動詞の主辭は略されたる「春」なり。【八】造次　急遽の貌、だしぬけ。【九】太　はなはだ、あんまりに。【一〇】丁寧　ていねい、くどし。

【題義】興にふれてふとつくりたる絶句。上元二年春浣花の草堂にての作。

【詩意】ろくでなしの春景色は自分がたびの愁にひたつて醉うてゐるのを眼前に見て知りながら吾が江亭へやつて來た。彼春色はりつぱな花をさかせるにしてもひどくだしぬけであり、いくら鶯にさへづらせるにしてからがあまりにくどいではないか。斎生め。

〔一〕　〔二〕

手種桃李非無主。
野老牆低還是家。
恰似春風相欺得。
夜來吹折數枝花。

【題義】春風の家宅侵入を責む。

【詩意】自分が手づから種ゑた桃や李は主がないわけでない、自分といふ主がある。このおやぢの家の牆は低いにはひくいがそれでも自分の家にちがひない。それになんだ、ゆうべからかけて二三本花の枝が吹き折られてしまつた、まるで春風めに侮辱されたやうなもんだ。

手づから種うるの桃李、主無きに非ず、
野老牆低きも還是れ家なり。
恰も似たり春風の相欺り得たるに、
夜來吹き折る數枝の花。

【字解】〔一〕非無主　主人あるをいふ、主人は自己。〔二〕家　吾が家にして他の闖入を許さざるものなるをいふ。〔三〕欺得　欺は侮るをいふ、俗語、欺得にてこちらがあなどらるるをいふ。

〔三〕

熟知茅齋絶低小。
江上燕子故來頻。
銜泥點汙琴書內。
更接飛蟲打著人。

茅齋の絶だ低小なるを熟知して、
江上の燕子　故に來ること頻りなり。
泥を銜みて點汙す琴書の內、
更に飛蟲を接して人を打著す。

【字解】〔一〕熟知　よく知つて、「知」の主辭は「燕子」。〔二〕茅齋　かやぶきの書齋。〔三〕絶　甚だ。〔四〕燕子　つばめ。〔五〕故　故意。〔六〕點汙　ぽちぽちけがす。〔七〕琴書　こと、ほん。〔八〕接　ひきつれてくる。〔九〕打著　かほなどにぶつつかる。

【題義】燕をののしる。

【詩意】江べりのつばめは自分の茅ぶきの書齋が非常に低く小さいのをよく知つてゐてわざとしきりにやつてくる。さうして泥をくはへてきては琴や書物のあたりをよごしたり、そのうへ飛びまはる蟲までひきつれてきて人にぶつつからせてゐる。

〔四〕

二月已破三月來。
漸老逢春能幾回。
莫思身外無窮事。
且盡生前有限杯。

二月已に破れて三月來る、
漸老春に逢ふ能く幾回ぞ。
思ふ莫れ身外無窮の事、
且つ盡せ生前有限の杯を。

【字解】〔一〕破　殘りすくなになる。〔二〕漸老　しだいに老いかかる身。〔三〕有限杯　いくらのんだところがその量に限りのある酒。

【題義】酒飲むべきをいふ。

【詩意】二月も終りかけ三月がくる。老いゆく我が身は春に逢ふとしてもいくたびあへるものか。だから一身外のはてしない事をかんがへるな、それよりまあまあいのちのあるうちに飲めるだけの酒をのみつくせ。

〔五〕

腸断江春欲盡頭。
杖藜徐歩立芳洲。
顛狂柳絮隨風舞。
輕薄桃花逐水流。

〔五〕

腸は断ゆ江春盡きんと欲する頭、
藜を杖き徐歩して芳洲に立つ。
顛狂の柳絮は風に隨つて舞ひ、
輕薄の桃花は水を逐うて流る。

【題義】桃柳をののしる。

【詩意】江の春がなくなりかけたころには春のゆくのをかなしんで腸がちぎれるやうだ。それであかざのつゑをついてそろそろあるいて花さく中洲に立つてながめる。するとみだれくるうた柳のはなは風のまにまに舞ひちり、うはきらしい桃の花は水の流れをおうて流れていつてしまふ。

【字解】〔一〕欲盡頭　欲ㇾ盡際といはんがごとし。〔二〕藜　あかざ。〔三〕芳洲　くさばなの咲いてゐる中洲。〔四〕顛狂　みだれくるふ。〔五〕柳絮　やまぎの花。〔六〕輕薄　うはき、操守なき。

〔六〕

懶慢無堪不出村。
呼兒日在掩柴門。
蒼苔濁酒林中靜。

〔六〕

懶慢堪ふる無く村を出でず、
兒を呼び日に在りて柴門を掩はしむ。
蒼苔濁酒、林中靜に、
碧水春風野外昏。

碧水春風、野外昏し。

【題義】無能獨酌の意をいふ。

【詩意】自分はぶしやうで、ものごとに堪へる才能の無い男だから村からそとへはいでず、毎日家にばかりゐてこどもを呼んで柴門をとざさせてゐる。蒼苔のしいた庭に濁酒をのんでゐると林の中はいと靜であり、碧水をわたつて春風が吹いて遠い野はらの方はくらくみえてゐる。

【字解】〔一〕懶慢　ぶしやう。〔二〕無堪　事物に處するに堪ふるものなし、不才無能をいふ。〔三〕日在　日日在ㇾ家の意、日在或は自在に作る、自在は「きままに」の意。〔四〕蒼苔一句　宅中のさま。〔五〕碧水一句　陶江の遠野のさま。〔六〕昏　茫し野潤煙光薄の煙光薄の義ならん。

〔七〕

糝徑楊花鋪白氈。
點溪荷葉疊青錢。
筍根雉子無人見。
沙上鳧雛傍母眠。

〔七〕

徑に糝はる楊花は白氈を鋪き、
溪に點ずる荷葉は青錢を疊む。
筍根の雉子は人の見る無く、
沙上の鳧雛は母に傍うて眠る。

【題義】春暮の景を列擧せり。

【詩意】こみちに亂雜に散つてゐる楊の花は白い毛氈をしいた樣であり、溪がはにぽちぽち浮き出し

【字解】〔一〕糝　雜はるなり、亂雜に散つてゐること。〔二〕點　ぽちぽちとあること。〔三〕疊　荷葉に高低あり、故にかさなりて見ゆるをいふ。〔四〕筍　たけのこ。〔五〕雉子　きじの子。〔六〕鳧雛　こがも。

た荷の葉は青色の銅錢をたたみあげた様だ。たけのこの根もとに雉がゐるが人からは見えぬ様にしてをるし、かはらの沙のうへにはこがもが母鳥によりそうてねむつてゐる。

〔八〕

舍西柔桑葉可拈。
江畔細麥復纖纖。
人生幾何春已夏。
不放香醪如蜜甜。

〔八〕

舍西の柔桑、葉拈る可し、
江畔の細麥復纖纖たり。
人生幾何ぞ、春已に夏なり、
放たず香醪、蜜の如く甜きを。

【字解】〔一〕拈　つまみとる。〔二〕細麥　麥の穂のほそきをいふ。〔三〕纖纖　「細」の字の形容、ほそほそ。〔四〕放　手からはなす。〔五〕香醪　かんばしきにごりさけ。〔六〕甜　あまし。

【題義】時過ぎ易きにより酒をのむをいふ。

【詩意】家の西の方のはたけの桑は葉が柔かであるからつみとつてもよろしい。かはべりのはたけの麥の穂もまたほそぼそとでてきてをる。こんなに春がもはや夏にかはりかけてゐるのをみれば人生はどれだけの時間あるのか、いくらもあるまい。だから自分は蜜のやうにあまいにごりさけを手から放さずのんでゐる。

〔九〕

隔戸楊柳弱嫋嫋。
恰似十五女兒腰。
誰謂朝來不作意。
狂風挽斷最長條。

〔九〕

戸を隔つる楊柳弱くして嫋嫋たり、
恰も似たり十五女兒の腰に。
誰か謂ふ朝來、意を作さずと、
狂風挽き斷つ最長條。

【字解】〔一〕嫋嫋　たをやか、なよなよ。〔二〕誰謂　だれがしかいふか、さはいはせじとの意。〔三〕作意　狂風が意を作すなり、意を作すとは女兒の腰を愛するの念を興すなり、舊解は取らず。〔四〕挽斷　ひつぱりてちぎる。〔五〕最長條　いちばんながい枝。

【題義】風、柳條を折りしにより風に向ひて戯言をなす。

【詩意】戸外の楊柳はかよわくなよなよとして枝をなびかせてゐる。その姿はちやうど十五歳ばかりのをんなの兒の腰つきに似てゐる。けさからかけて風もヒョンな意をおこしたものか、くるひだした風がいちばん長いえだをひきをつてしまつた。

客至　【原注】喜崔明府相過。

舍南舍北皆春水。
但見羣鷗日日來。

客至る　【原注】崔明府が相過るを喜ぶ。

舍南舍北皆春水、
但見る羣鷗の日日來るを。

【字解】〔一〕崔明府　某縣の縣令崔某なり、作者の舅氏なりとの說あれどいかがにや。〔二〕花徑　花

花徑不曾緣客掃。　花徑曾て客に緣りて掃はず、
蓬門今始爲君開。　蓬門今始めて君が爲に開く。
盤餐市遠無兼味。　盤餐、市遠くして兼味無く、
樽酒家貧只舊醅。　樽酒、家貧にして只舊醅あり。
肯與隣翁相對飲。　肯て隣翁と相對して飲まむや、
隔籬呼取盡餘杯。　籬を隔てて呼取して餘杯を盡さしむ。

【題義】崔明府がたづねてくれたことを喜んで作つた詩。

【詩意】吾が家は南も北もみな春の水で、たくさんの「かもめ」が毎日やつてくるのをみるばかりである。花の散りしくこみちもお客があるために掃除したことはないのであるが、けふはめづらしくよもぎふの門を君のためなればこそ開いたのである。ここは市場が遠いから皿の食物に幾種類もの御馳走はないし、家が貧しいから樽の酒もてづくりのふるものだ。われわればかりよりもとなりのおぢいさんもなかまにしてさしむかへで飲むおつもりはありませぬか。かくいうて籬越しにおぢいさんを呼んでのこりの酒杯をのみほさせる。

のちりしくこみち。【三】蓬門　よもぎのしげれる門。【四】盤餐　大皿の食物。【五】兼味　いく種類ものごちそう。【六】舊醅　ふるくかちつくりこんだにごりさけ。【七】呼取　翁を呼ぶないふ、取の字は意輕し。

遣意二首

意を遣る　二首

囀枝黃鳥近。泛渚白鷗輕。　枝に囀りて黃鳥近く、渚に泛びて白鷗輕し。
一逕野花落。孤村春水生。　一逕、野花落ち、孤村、春水生ず。
衰年催釀黍。細雨更移橙。　衰年、黍を釀すを催す、細雨更に橙を移す。
漸喜交游絕。幽居不用名。　漸く喜ぶ交游の絕ゆるを、幽居、名を用ひず。

【字解】【一】催　せきたてること。【二】釀黍　きびを用ひて酒をかもす。【三】移橙　だいだいをうつしかへてうゑる。【四】交游　人との交際。【五】名　他人から名譽を得ること、名譽。

【題義】おもひをやる。うさばらしに作つた詩。

【詩意】黃鳥は近く枝にさへづり、白鷗は輕く渚に泛んでゐる。一すぢのこみちに自然にさいた花が落ちちり、さびしい村には春の水がふえてきた。自分は老衰になりかけてせつせと黍で酒をつくりこみ、こさめのふるときには橙の木など移植する。こんなことをしてくらすので、だんだん友だちの交際がなくなるのをうれしくおもふ樣になつてゐる。このわびずまひに名譽などはいらぬものだ。

〔二〕

簷影微微落。津流脉脉斜。　簷影、微微として落ち、津流、脉脉として斜なり。

309
65

野船明細火。宿鷺起圓沙。　野船、細火明かに、宿鷺、圓沙に起つ。
雲掩初弦月。香傳小樹花。　雲は掩ふ初弦の月、香は傳はる小樹の花。
隣人有美酒。稚子夜能賒。　隣人、美酒有り、稚子夜能く賒る。

【字解】〔一〕落　地上によこたはるをいふ。〔二〕津流　浣花の溪流をさす。〔三〕脉脉　一すぢ一すぢに。〔四〕細火　小火。〔五〕起　起立してゐること。〔六〕圓沙　まろき沙はら。〔七〕賒　かけで買ふ。

【題義】草堂春夜のさまをのぶ。

【詩意】日がくれかかるので簷の影がすこしづつすこしづつ地上に落ちる。わたりばの水流は一すぢ一すぢに斜にながれてゐる。民船には小さい火があかるくともつてをり、とまつてゐる鷺は圓形の沙はらに起つたままでをる。みか月は雲におほはれ、ちさい樹にさいた花からくらがりの香がつたはつてくる。となりにはうまい酒をもつてゐるものがをるので、こどもが夜ではあるがいつてとつてきてくれる。

終